

「なにしょん」から「つながり」を考える

増田 一世

娘が幼稚園時代、姉妹のように過ごしていたお嬢さんとお母さんとぼったり出会った。幼いころの面影もその表情に残っており、何とも懐かしい思いになった。お互いに一人っ子で、お互いの家を行き来し、やどかりの里の仕事で出かけるときや仕事で遅くなったとき、ずいぶん助けてもらった。

当時は駅の近くの賃貸マンション住まいだったが、ベビースイミングの仲間や幼稚園のつながりで、近所に知り合いが多く、我が家が保育園のように賑やかなときもあった。その後、実家の近くに引っ越すと同時に仕事も忙しくなり、育児と家事の主な担い手は実家の母となり、近隣の人とのつながりはぼったりと途切れてしまった。もちろん幼馴染が住む地域なので、〇〇ちゃんと呼び合う人はいるのだけれど、お互いに困ったときに助け合うような関係はない。

改めて、子どもが接着剤になって、地域でのつながりができていたことに気づかされる。

やどかりの里の職員の1人、大澤美紀さん（大宮区障害者生活支援センターやどかり代表）は愛媛県西条市丹原町の出身。時折実家に里帰りするが、そのときの模様をおもしろ、おかしく報告してくれる。先日、チーフ職員（やどかりの里の各事業の責任者）の合宿で、盛り上がっ

たのは、「なにしょん」という声かけをめぐる近隣との関係だった。語尾の上げ下げ、口調の強弱でいろいろな使い方があるらしい。同郷の白石直己さん（やどかりの里援護寮施設長）は、何をしているのだと強い語気で怒るとき、女の子をナンバするとききかけとなるような軽い声かけ、おはようやこんにちはの代わりの「なにしょん」があると言う。

里帰りをした大澤さん、お父さんが農協に買物に行くのに付き合っただけのところ、「なにしょん」と話しかけたお父さんは延々と立ち話を始め、やっと終わったかと思ったら「あの人はどこの人じゃったかね」と尋ねる始末。見知らぬ人でも「なにしょん」と話しかけて、そのことに違和感がない地域社会なのだそう。高年齢化率は高いが、高齢者でも生きやすい社会」と大澤さんは言う。近隣の人たちの中で困った人がいれば、お互いに助け合う関係性が育まれている。

いまの日本には、新自由主義がはびこり、なんでもお金に換える発想が蔓延している。障害者支援も障害者自立支援法により、サービスの提供側と受け手に分断させられてしまった。分断される社会の中で、「なにしょん」とさりげなく声かけができる関係、ちょっと手を差し伸べられるような関係、地域の中の「つながり」をもう一度紡ぎだすことが大切だ。